様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月５日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2012
課題番号：２０５２０２１４
研究課題名（和文）　ポストインペリアル英国文化と長い 20 世紀

研究課題名（英文）　Postimperial English Culture and the Long Twentieth Century

研究代表者
大田　信良（OTA　NOBUYOSHI）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：９０２３３１３９

研究成果の概要（和文）：現在のポストインペリアルな歴史状況における英国文化は、大英帝国解体後になおも残存する帝国意識、または、その保守主義を批判的に乗り越える新たなヒューマニズムと多文化主義の可能性によっては、十分捉えることができない。むしろ、21 世紀の現在につながるグローバル化や帝国主義に注目する「長い 20 世紀」の視座を考慮することにより、本研究は、「英文学」をその重要な一部とするグローバルな帝国の文化が、冷戦期米国のモダニズム文学と大学の研究・教育制度の編制にトランスナショナルに転回した英国リベラリズムの政治文化によっても担われていたことを論じた。

研究成果の概要（英文）：This research project has shown that the present English culture, itself deeply embedded in and actively engaged with the various developments of globalization and neo-imperialism, cannot be explained enough by the current interpretative schemes of the political conservatism (“post-imperial melancholy”) and the liberal and humanistic multiculturalism. Rather, taking into consideration the narrative scheme of the long twentieth century, the more adequate interpretation of postimperial English culture, I have argued, is explored in its transatlantic expansions of the liberalism of Bloomsbury Group, English heritage films, and literary/cultural theory, in which history of culture of empire is variously traced in meta-diachronic or genealogical ways.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：ポストインペリアル、長い２０世紀、リベラリズム・ヘリテージ、批評理論、映像文化、ブルームズベリー・グループ、アソシエーション

１．研究開始当初の背景
近年、英国文化とポストインペリアルな歴史状況との関係を問う研究が顕著になってきている。たとえば、Fredric Jameson の “Modernism and Imperialism”(1990)を踏まえ、30 年代以降の英国国民文化の構築・編制を論じた Jed Esty の *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in*

England(2004)も、その帝国の衰退や収縮を主題化しているにもかかわらず、実は、大英帝国のポストインペリアルな文化的影響力（たとえば 90 年代以降のアメリカ多文化主義への影響）を問題にしている。従来のように、20 世紀を戦争と革命の世紀と捉え、実質的には、ロシア革命にはじまりサッチャリズムにおわる「短い 20 世紀」――および、政治と文学との二項対立による、20 年代の実験的文学の時代と 30 年代の政治的文学の時代といった図式――を研究対象とするのではなく、むしろ、政治と文学が相対的自律性を保ちつつも相互に連動・連関している、従って、英国の古い帝国主義とその文学と米国の新しい帝国とその文化との区別も資本主義世界のグローバル化の諸過程において差異や対立を含んだ連続体として捉えるということだ。すなわち、英国の政治的リベラリズムやモダニズム文化は、帝国としての米国へと系譜的につながる、「長い 20 世紀」(Giovanni Arrighi *The Long Twentieth Century* (1994))において解釈されることが、現在、要請されているのではないか。

２．研究の目的

本研究の目的は、ポストインペリアル英国文化、すなわち、脱植民地化の動きに伴う 20 世紀全般にまたがる英国の政治および文学・文化の総体を、明らかにすることにある。1920 年代を中心とする狭義のモダニズム文学、戦間期に再編制される国民文化、50 年代の文化研究といった、英国 20 世紀前半 50 年の時間的・空間的範囲をさらに拡張して、現在ますます顕著となる文化のグローバル化と新たな帝国主義のさまざまな関係性を解釈する。

３．研究の方法

具体的な研究の方法としては、研究対象である英米両国の拡張主義的な文化空間に繰り広げられる長い 20 世紀を、以下の 3 つの研究主題領域に区分し、ポストインペリアル英国文化の全体像を把握する。

（１）グローバル化や多文化主義といったポストインペリアルな政治文化を特徴づける、英国のリベラリズム・社会主義の文学や社会思想、および、植民地文学。

（２）80 年代サッチャリズム以降の英国文化の代表的な文化的生産物としてのヘリテージ映画とそのグローバルなコンテクストとしての米国ハリウッド映画産業。

（３）Raymond Williams らによる 50 年代英国の文化研究に対して人種や帝国主義の観点から批判あるいは発展させたカルチュラル・スタディーズ、および、それらに批判的に反応・連動してきた英米のポスト構造主義以降の批評理論。

４．研究成果

1990 年代以降の文学研究・批評理論は、リベラルな多文化主義の可能性や現在のグローバル（あるいは「惑星的な(planetary)」）な歴史状況を探る試みをおこなってきたといえる。たとえば、Paul Gilroy の *After Empire: Melancholia or Convivial Culture?* (2004)は、英国の保守主義あるいはその政治文化に大英帝国解体後になおも残存する帝国意識を批判的に取り上げた。だが、そうした政治的無意識にみられる不安は、戦後に覇権国となった米国のネオ・コンサーヴァティズムや冷戦イデオロギーの亡霊の場合と同じく、20 世紀末からますます顕著となってきている経済・文化のグローバル化と新たな帝国主義のさまざまな進行や拡大に起因するものでもあった。したがって、英国文化、あるいは、「英文学」をその重要な一部とするグローバルな帝国の文化は、大英帝国からの脱植民地化や冷戦状況の動きに伴う 20 世紀全般にまたがる英米のトランスナショナルな地政学によって、明らかにされなければならない。本研究がその成果として明らかにしたのは、21 世紀の現在につながるグローバル化や帝国主義のイデオロギーが、実のところ、英国リベラリズムの政治文化によっても担われていたこと、この点にほかならない。

具体的には、1920 年代を中心とするコスモポリタンなモダニズム文学と 30 年代における国民文化の編制を経て 50 年代のナショナルでポピュラーな文化研究のはじまりにいたる英国文化の歴史のプロセスが、まず、冷戦期米国にハイ・カルチャーとして制度化された文学的なモダニズムと大学におけるナショナルな文学研究との関係において、さらには、ポスト冷戦期のカルチュラル・スタディーズとポピュラー・カルチャーのグローバルな再編において、編制されてきたことを、ブルームズベリー・グループのリベラルな政治文化、80 年代以降のヘリテージ映画のグローバルな転回、英米の批評理論の系譜の 3 つの主題領域において、示した。換言すれば、ポストインペリアルな英国文化は、英国モダニズムやリベラル・イングランドの政治文化から帝国アメリカへとトランスアトランティックに転回する「長い 20 世紀」(Giovanni Arrighi)というメタ通時的・歴史的視座によってはじめて十分な解釈できることを提示した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①<u>大田　信良</u>、「The Years、リベラリズム、

アソシエイション――ブルームズベリー・グループの政治文化」　『英文学研究　支部統合号』、査読有、第４巻、2011、P1-11

②大田　信良、「知識人の「誕生」とブルームズベリー・グループ第２世代の作法――リベラル・イングランドのトランスアトランティックな転回」(特別シンポジアム知識人の作法？――リベラリズム、歴史、文学)、『第 82 回日本英文学会全国大会 Proceedings』査読無、2010、P175-79

③大田　信良、「批評理論の制度化についての覚書――トランスアトランティックな文学・文化研究のために」　『言語社会』一橋大学大学院言語社会研究科 2009 年度紀要、査読無、第４号、2010、183-212

④大田　信良、“Lawrence and Postimperial English Culture” 『Ｄ・Ｈ・ロレンス研究』、査読有、第20号、2010、43-59

〔学会発表〕（計８件）

①大田　信良、「エリオットの文化論、制度としての「英文学」、クリエイティヴ産業――1990 年代英国カルチュラル・スタディーズ／文化政策学のあとで」【招待講演】日本T.S.エリオット協会第25回全国大会、2012 年 11 月 11 日、東京学芸大学（東京都）

②大田　信良、「英国モダニズム文学、(ポスト）ヘリテージ、文化政策」日本ヴァージニア・ウルフ協会７月例会、2011 年７月９日、青山学院大学（東京都）

③大田　信良、「『トマス・ハーディ研究』と金融資本――スパイ小説／ “Sex Novels”／「教養小説」」日本ロレンス協会第４２回シンポジウム 『トマス・ハーディ研究』再読のために――リベラリズム、帝国、「教養小説」の転回、2011 年 6 月 25 日、神戸大学（兵庫県）

④大田　信良、「知識人の「誕生」とブルームズベリー・グループ第２世代の作法――リベラル・イングランドのトランスアトランティックな転回」日本英文学会全国大会、特別シンポジウム、2010 年５月 30 日、神戸大学（兵庫県）

⑤大田　信良、「マネーへの思索＝投機(speculation)とサッチャリズム以降の帝国――ジャンルはほんとに解体したのか？」東北英文学会シンポジウム「英文学におけるジェンダー／ジャンル」、東北英文学会第６４回大会 2009 年 12 月６日、秋田キャッスルホテル（秋田県）

⑥大田　信良、「誰も Edward W. Said を読まない？―終わらない冷戦と Reagan 期米国批評理論のさまざまなはじまり」【招待講演】日本アメリカ文学会第 48 回全国大会シンポジア「今一度冷戦を考える」、2009 年 10 月 11 日、秋田大学（秋田県）

⑦大田　信良、「冷戦期米国批評理論と Edward W. Said を読まない？――ドライサーかジェイムズかの文学史を、トランスアトランティックに、見直すために」第２回「トランスアトランティック・モダニズム」研究会講演、2009 年９月 27 日、一橋大学（東京都）

⑧大田信良、“Lawrence and Postimperial English Culture”（日本ロレンス協会第 40 回記念大会シンポジウム　Lawrence Studies in East Asia）日本ロレンス協会第 40 回記念大会、2009 年６月 27 日、名古屋工業大学（愛知県）

〔図書〕（計６件）

①大田　信良、『文学研究のマニフェスト――ポスト理論・歴史主義の英米文学批評入門』三浦玲一編 東京: 研究社出版、2012、205（第５章「帝国、インターナショナリズム、グローバリズム――英国フォーディズムのディストピア、あるいは、『すばらしい新世界』のエコノミー」121-48）

②河島伸子、大谷伴子、大田　信良編、『イギリス映画と文化政策――ブレア政権以降のポリティカル・エコノミー』東京: 慶應義塾大学出版会、2012、 201.（「まえがき」i-vii.第６章「「成長」のポリティカル・エコノミーと『アバウト・ア・ボーイ』――変容するロマンティック・コメディ」133-55、終章「ポピュラー・カルチャーのグローバルな再編とはなんだったのか？――文化的価値の再解釈に向けて」157-82、その他コラム、年表等）

③大田　信良『愛と戦いのイギリス文化史　1951－2010 年』川端康雄ほか編、東京: 慶應義塾大学出版会、2011、 478（第 18 章「ベケット、ナボコフ、そして文化冷戦――「モダニズム文学」の制度化」319-33）

④大田　信良、『帝国の文化とリベラル・イングランド――戦間期イギリスのモダニティ』東京: 慶應義塾大学出版会、2010、259

⑤大谷伴子、松本朗、大田　信良、加藤めぐみ、木下誠、前協子共編著、『ポスト・ヘリテージ映画――サッチャリズムの英国と帝国アメリカ』東京: 上智大学出版、2010、 1-251.（第６章「『スキャンダル』――金融資本とカントリーハウスの文化」169-98、終章「英米の『特別な関係』のかなたへ」199-210、その他コラム、年表等）

⑥遠藤不比人・大田　信良、ほか編、『転回するモダン――イギリス戦間期の文化と文学』、東京: 研究社出版、2008、377.（第 17 章「金貨のポリティカル・エコノミー――帝国の文化とブルームズベリー・グループ」337-59）

６．研究組織

(1)研究代表者

大田　信良（OTA　NOBUYOSHI）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：９０２３３１３９